

鮮支旅行記

方 哲 源

數年來の宿願である兒童連れの鮮支旅行の念は止み難く、自己の力なきをも省ず、よき先師日持上人の精神に學び、大膽にも支那、朝鮮、日本兒童等の間に美しき隣國の友人であると共に、東洋の兒童たる事を自覺させ、相互の意志を交換せしめ、尙日常生活に於ける細事までも相互に了解し得て、同根枝葉の眞義を永久に持續すると共に、東洋人の永遠な平和を建設す可き新しき生命とも云ふ可き可愛らしき兒童の熱い握手により、親善を計る可く、暑中休暇を利用して、幼き田村皇富士(十三才)君を連れて目的地たる鮮支に行く事に決心した。

私は靜かに兩手を合せて、御祖師様に途中安泰を祈りつゝ身延山を出發した。

× × ×

七月廿二日それは靜かな朝だつた。

大勢の祖山の學兄達に見送られて車中の人となり、富嶽を後に残して廣島へ着いたのは朝の四時だつた。渡部氏や中村氏等が迎へに來て呉れた。直に電車で保育園に行つて、川本先生等に迎へられ、特に私達の爲めに茶話會が催され、私達の身延山の話を始め諸先生の宗教教育に關するお話を園内生徒

達は大變満足げにきいてゐた。それから有名な巖島や羽田動物園とそれぞれ市内名所を一日中ゆつくりと見物して、又皆に見送られて下關行の特急にのつた。

ねむりの中に下關へ着き、他の客と共にすぐ釜山行の連絡船にのりかへる。船は静かな波の上を苦もなげに滑る。エンヂンの音が喧しくなつて來ると同時になんだか般室にゐるのがいやになつたので甲板に飛び出した、静かに寝むれるが如き海上の遙か向ふに走り行く一隻の商船を發見した、蒼空には美しい群星が耀いてゐる、淋しくも一人甲板に立つて遠くから溢れ寄する静かな波を無意識に眺めてゐた、波は次第に荒く船の横面にぶつつかる、私はあつちこつちに轉がされながらふとこんな事を思ひ出した、基督がカフナウムと云ふ所の海邊に於て眞の道の爲めに海上を陸地の様に歩いた事、それから日蓮聖人の波題目の事を思ひ出して批較して考へて見た。

その内船は波靜かな釜山港に着いた。港頭には李君を初め、大勢の子供達は両手に美しい旗を持つて、熱狂的に異郷の友田村君を迎へて呉れた、それから李君の案内で市内を見物して、午後四時頃基督教會の日曜學校で童話會が開かれた。田村君のもつと少さかつたときの話や現在の日本兒童の教育に就いての感想を李君の通譯で話し終ると金英玉嬢の歡迎獨唱があつた。

翌朝七時に天真爛漫な子供達に見送られて大邱、太田等の都市に於ても同じく小供達に熱心に送迎されて、懐かしき三百年の王都であつた我が故國の首都京城に着いた。

プラットホームには我が幼き友金泳植君を初め、方夏容氏と、真信女學校の先生達と、又日曜學校の生徒は驛前に隊を作つて私達を迎へて呉れた。それから一同は特に田村君に對して萬歳三唱をして私達はすぐ電車で方夏容氏宅へ行つた、方氏は喜びの餘り、暑さも忘れて私達の爲めに自分自ら案内役と定めて、市内外の有名な諸方面を案内してくれた。氏は資産家で又社會事業家であるから本當に理解ある人だ。此の間、特に面白かつたのは各教會經營の日曜學校に於ける童話會に招待された時の事だ、天主教の孤兒院に行つて、田村君が日本の話や、特に身延山のお話及び日本人の生活状態なんかを話す時、孤兒達は日本語を知らないから朝鮮語でやつて呉れなければ私達は一つも面白くないよと言つてゐた。丁度その時、金泳植君が流暢な朝鮮語で孤兒達に田村君のお話を傳へてやると、皆なすかつり喜んで兩手を舉げてもつと澤山面白いお話をして呉れと騒ぎ出した。その内中央日曜學校々長が迎ひに来てくれたのですぐ皆とお別れをして、自動車で中央日曜學校へ行くと、百餘名の兒童は私達が來るのを待つてゐた、校長先生は靜かに聖殿の前に立つて童話會の爲めに簡單なお祈りを捧げそれからアメンと共に面白い童話會が盛大に開かれるや、歡迎の兒童等のクラスがあつてすぐ多數の兒童中から歡迎の辭があつた、それから田村君のお話を金君の通譯で終ると、東洋兒童の將來と云ふ題の下に、真信女學校の先生方信榮女史の一場の講演があつた。その他に記す可き事が澤山あるが紙數に制限があるので畧す。特に感謝しなければならないのは、今回私達の爲めに方氏の如きは、精神

的の援助は云ふ迄もないが、物質的に於ては旅費半分以上方氏の援助である。京城に於て招待された順序は眞信學校側、於中央青年會館食堂、中央日曜學校側、於食道園、有志者間、於東亞食堂。各個人家庭に招待された順序は、方夏客氏、金俊龍氏、李貞淑嬢、金泳植氏、玉吉科氏（中國人）、濱田豐子氏等である、ここに記して感謝の意を表しておく次第である。

それから南山公園内の朝鮮神社に參拜し、次に動物園を見たが、之等は實に東洋第一と稱しても恥ずかしくない位だ、又博物館中に於ける古代高麗の佛教遺物の如きは實に立派なものが澤山ある、その中特に目をひいたのは法華經に關する書籍と佛像であつた、かうした歴史的事實を持つてゐる古代の朝鮮佛教が、今日の如き沈衰状態に至つたのは實に悲しまなければならぬことである。

元山は昔から有名な要港であると同時に本當に景色のいい所だ、美しい白砂は十里に及び、白い帯を長く引けるが如き海岸には繁れる赤松が點々として立つてゐる、その間を桃色の海裳が點綴して柔かい氣分を添へる、實にかうした景色は元山港の誇りと言はねばならない、此の自然の母の膝に甘へて遊ぶ海水浴客はかなり賑やかだ、名砂十里白砂場を通つて金剛山行の自動車は、まるで戦争の氣分を現はしてゐた。舊友李昌善君と名石洞子供達は、面白い日曜學校の旗を持つて迎ひに来て呉れた。そして、李君は相變らず元氣で僕の手を力一パイ握りながら、「會場は教會にしました」と言つて、それから大勢の子供達と一緒にしやぎながら教會へ行つた。教會には最早や大勢の子供達は私達が來

るのを待つてゐた、子供好きな李君は流暢な日本語で田村君に面白さうなことを何か言つてゐた、その内開會のリンがなるや、李順玉嬢のオルガンの演奏と子供達の歓迎合唱が始まる、田村君は感想談を私は將來の日鮮兒童と云ふ題の下に講演をした。

咸興、端川も、矢張り同じ歓迎の内に暫時立ち寄つて子供達にお話をした。

城津は數年間厄介になつてゐた土地であるからいかにもなつかしい氣がる。けれども七八年前よりは随分様子が變つた様にも見える、舊友申鉞道兄に會つて來意を告げたが、不幸にも昨年火事にあつて小學校は全焼されたさうだ、その上、只今は暑中休暇であるし、又城津は先天的に宗教的方面には恵まれない故、宗教的色彩ある集合は歓迎されないらしいから童話會は止める事にして、申兄と共に城津公園から沈靜かな夕暮海邊を散歩した、呂同春兄の如きは胸襟を開いて將來の佛教に對する希望案を述べて下さつた。特に申兄に感謝するは田村君の植物標本の爲め非常に努力して呉れた、その外澤山のお錢別も戴いたことだ。

臨溟市の普通學校の生徒の如きは、田村君が日本にゐる時から相互に手紙の交換まであつた故、因縁が深い所だ。朴完實君と、嚴四月君、其の外大勢の兒童達は眞心から私達を迎へて呉れ、すぐ果樹園から廻つて男女の生徒達に迎られて學校の方へ行き、愉快な談話會が終つて後庭球會が始まつた。それから午後二回も先生と生徒と一緒に記念撮影をした。

咸興から一緒に來た李君は本當に面白い人だ、私達の爲めに三日續けてお伴をして下さつた。

加藤清正の朝鮮征伐で有名な會寧迄來た、不幸にも昨日まで大雨が降り續けたので私どもは本當にお話にならないほど悲惨な状態だつた。舊友尹逢春君は十五六人の小供達を連れて迎ひに來て呉れた喜びと共に普興小學校へ行つて大勢の生徒と先生達に迎へられて、田村君の通譯で身延山のお話やら南鮮方面の感想を述べた、それから金玉順嬢と尹英和君の歓迎の合唱が終つて、先生の自邸へ迎へられて御馳走になつた。

いよ／＼朝鮮北方に於ける最後の都會である會寧とは別れなければならないが、大雨の爲めに支那行の鐵道は全然不通となつた、けれども切角の旅であるから引き返へすのも残念だし、積極的に兎も角も行ける所まで豫定日割の通りに行つて見る事に決心した、そして尹君に支那行の馬を頼んで田村君は馬に乗り、私は歩いて晩の十二時頃に上三峰と云ふ所へ着いた。朝七時頃に起て見れば、はるか川向ふには平和な支那の山川が見え、そののんびりした野原には可愛らしい一群の小羊も見ゆるし、又支那の有名な高粱田も見えてゐた。十時頃私達は國境守備巡查に渡江検査を受けて、すぐ橋を渡つて支那の國境へ行つた所が矢張り同じ様に支那の國境巡查も渡江者を検査してゐた。圖們驛へ行つて見た所が全然開通の見込みがないと云ふから仕方なしに驛前で開通するまで待つ事にして、毎日支那の商人達と將棋や談話會で暮したが、四日目に始運轉車が六道溝市まで行くこと云ふからそれに

乗つて六道溝市まで行つた。そして恩人である所の光明會主幹日高丙子郎先生の舊邸を訪問したが、先生は光明會の用事で本國へ歸られた後であつた、本當に先生がいらつしやらないのは今回私の旅行に取つては實に遺憾である。そこで先生の代理崔斗南先生を訪問して來意を告げたが、先生は厚意を持つて迎へてくれた、それから先づ先生は光明會の社會事業の説明及び案内をして下された、日高先生が北滿州の雪風と二十有餘年間寢食を忘れて惡戰苦闘したその結晶が即ち光明會である。光明會の趣志は即ち「人道の闇を照らし、東洋の燈を掲げ、教育、産業、信仰の充實せる極東の丁抹、東方の端西を白山黒水の間に建立し、以て東亞の泰平を守護せんとの祈願の下に、鮮支同志た相謀り、日支當局の許可を受け、當地に光明會と申すを發起す」と云云。

光明會の事業は教育、農業、工業等である。先づ教育機關としては、幼稚園、小學校、中學校、師範學校、半日學校、女學校、語學校等である。その他、光明農園、光明牧場、光明紡績社の如きは實に立派であつた。かうした大事業を一個人の力に由つてしかも如斯隆盛に至らしめたのは、實に日高先生の超人的人格によるものであると思ふ。崔先生はその他市内外の名所までも親切に案内して下され、お蔭にて悉く見物する事が出來た。その内特に印象に深く残つてゐるのは支那人の小學校等に行つた時のことだ、成城小學校の如きは實にすべてがよく整つていたし、その教授方は本當に内地に於ても見られない位の所もあつた、その中で習字と圖畫の如きはまるで美術學校へでも行つた様な感じ

がした。先生達は誠意を以て私達を迎へてくれた、そのみならず、崔先生の通譯に由つて、今日の様な日支兩國の立場にも關らず、斯様に日支兒童間に面白い談話會が開かれた事は實によるこぼしい事であり、私はこのシーンを如實に見て思はず感謝の涙にくれた。

それから職員室に於て支那の有名な御茶を戴いてから、學校の前で先生達と一緒に記念寫眞を撮つて後御別れした。私は田村君を連れて東山の基督教側の主催に由つて開かれた日曜學校大會に参加した所が、幸にも小學校時代バイブルの受持であつた梁英哲先生に十有餘年目ではつたりあつた、本當にうれしかつた。それで私は現在日本に於ける教育制度と日曜學校等の近狀を話した。それから晚餐會が終つて旅館におちついたのは六時頃であつた。二ヶ月の長雨で汽車は全然不通であり、その上、支那の土は全國的ではないが粘り氣があるので自動車も動けない、かやうな場合に子供を連れて歩くのは非常に危険であるから、光明農園を解放していただいて、田村君は毎日果實園に行つて青木君や、又他の支那の子供達と一緒に遊ばせていただく事にして、私は一人で局子街市まで馬車にのつて行つた。柳容熙氏に迎へられ、市内有名な支那の道立師範學校を初め、各教育機關を見學し、又柳氏達の教會の經營である日曜學校に案内され、五十有餘名の生徒達に迎られて、「東洋兒童の覺醒」と云ふ題の下に約一時間ほど面白く話した、それから二三の舊友達の歡迎會へ招待され本當に面白くあそんだ。此處に於て特に述べなければならぬのは、六道溝市は北滿州に於ける帝國の總領事館の所在地

であると共に、日本歴史上に新しき光明を與へた地である、又加藤清正の朝鮮征伐を普通は會寧まであると言つてゐるが實はさうでない、それは北滿州に起居する事二十有餘年間の直接經驗を持つて居られる日高先生の研究に由れば、加藤清正が朝鮮征伐の時は、六道溝市まで來て更に高子街市方面までも進軍した形跡あるとの話した、その證據品としては當時加藤清正が用ゐた所の劔一振と、釜一個は現在當地總領事館に保管されてある、故に此の地は其の昔から日本人とは深い因縁がある土地だ。特に崔斗先生の詳細な説明も拜聽したので疑ふ餘地なきを信ずると共に今回先生に多大な物質的援助を受けた事を眞心から感謝する次第である。

いよいよ開校も近づいて來るし、長い旅に疲れたわけか、なんだか身延山が戀しくなつて來た、八月の二十五日の靜かな朝七時、崔先生を初め、尹水晶嬢及び青木靜子嬢の兄弟達以下大勢の子供達に見送られて、印象の深いこのなつかしい地を後にして歸へる事にした、汽車が動き初めると共に大勢の子供達は泣きながら聲をかけて、田村様、又いらつしやいね、そして連發的にさよなら〜と言つてゐた。自然でも別れをおしむ。私はかうした白紙のやうな純な赤兒の衷心から湧出する此の美しき情に包まれて泣かすには居られなかつた、彼の基督が言つた「赤兒の心こそ神の國を見る事を得べし」と、實に聖言であると思ふ、僅か一週間前に知りあいになつた異國の友を涙を以て見送つて呉れるは實に美しい兒童の心である。私達は云ひ知れざるよろこびと愛着の心を抱いて、八月二十九日午後六

時半に下關へ着きすぐ身延へ向つた。

近 况 十 首

山深かき冬の夜こそ悲しけれすぎきしわれの省みられて

山寺の鐘の音空にひびくらし山の端出づる夕月ふるふ

唯一人野に立ち出でて思ふまゝ泣きてもみたきわが心かな

やるせなき心抱きて夏の夕べ暮れゆく丘に口笛ふきぬ

ゆく春の岡べの道を歩みつゝ幼き兒等の草笛きくも

草にねてしみく仰ぐ空の色藍ふかふして心なごめり

水すめる川のほとりの草にねて瀬の音かそげく心にきこゆ

雨去りて群がる雲のひまゝに青き色見る心うれしき

梅雨霽れの明るきひるの大空を白雲流る脚連ねして

黒 崎 與 志 雄